



TITLE:

インド洋で見た星座

AUTHOR(S):

山本, 一清

---

CITATION:

山本, 一清. インド洋で見た星座. 天界 1926, 6(62): 123-127

ISSUE DATE:

1926-02-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/160511>

RIGHT:

# インド洋で見た星座

山 本 一 清

自分は、さきに外遊して、アメリカに可なり長く滞在し、それから欧州の各地を半年ほども旅しまはつたが、其の間、人間の住む國々の景色にはいろいろの珍らしさがあつて、時々心を慰めた。しかし自分にまつて今一つ「外國氣分」のしないものがあつた。それは即ち天に見える星座のこゝであつた。アメリカでも歐羅巴でも、やはり、北斗が見え、牽牛や織女が見え、プレヤデスが見え、オリオンが見え、カシオペ、ペルセ、アンドロメ、セフエ、獅子、乙女など、數へ上げるこゝ、すべて日本に居て見馴れてゐるものばかりが見へてゐるのだから、晝は人間相ひ手にいろいろ心が紛れてゐても、夜になるこゝ全く生れ故郷の日本に居るやうな心持ちであつた。——勿論、天の星を見て、日本に居るやうな氣持ちになるのは、或る意味に於いて、嬉しい事の一つであつた。外國にゐる他の多くの日本人たちは、むしろ、餘り外國くさい氣分が身の週りに多過ぎて、大丈夫と思ふ人々までが可なりホーム・シクに悩まされてゐるたのであるから、自分が夜の星さえ見れば生れ故郷に居るやうな氣持ちになれるこゝは、多くの在外の日本人たちを羨やましがらせるわけでもあり、又、「この感じは自分が職業(或は趣味)上から與へられた特權である」やうにも思はれたが、しかし、

「贅澤な慾心を起すな！

こゝ時々友人からからかはれながらも、外國に來て居るのだから本統に外國氣分になつて見たいこゝ、時々思つた。

尤も、歐米旅行中、可なり緯度の違つた所へは行つた。最も低い緯度としては北米カリフォニア州のサンデーゴ市の北緯三十二度四十三分から、最も高い緯度としては大英國エデンバラ市の北緯五十五度五十七分まで、南北二十三度の範圍にわたるのであつたから、北極星の高度も、土地々々によつて、すいぶん、低くも高くも見た。しかし、自分の故郷の京都が北緯三十五度一分であつて、冬の南天にはカノプスも見える場所なのであるから、自分の歐米旅行中は、殆んど常に京都以北の土地にのみ居たわけで、従つて、京都で見ない珍しい星座の一つも見る機會は無く、つまり、見古した星ばかりを、こゝへ行つても見せられてゐるのである。

「京都からはカノプスが見えますよ」

こゝ言つて、自分は此所彼所の天文家たちを羨やましがらせたこゝもある。

「新しい星座が見たい」

こゝきこゝ自分はこんな事を思つた。——だから、1924年の末、オランダのライデン天文臺で偶々南アフリカへ歸り行くインネス教授に會ひ（「天界」第 51

號第122ページ参照,)「アフリカへ来ませんか」に切りにすゝめられた時、

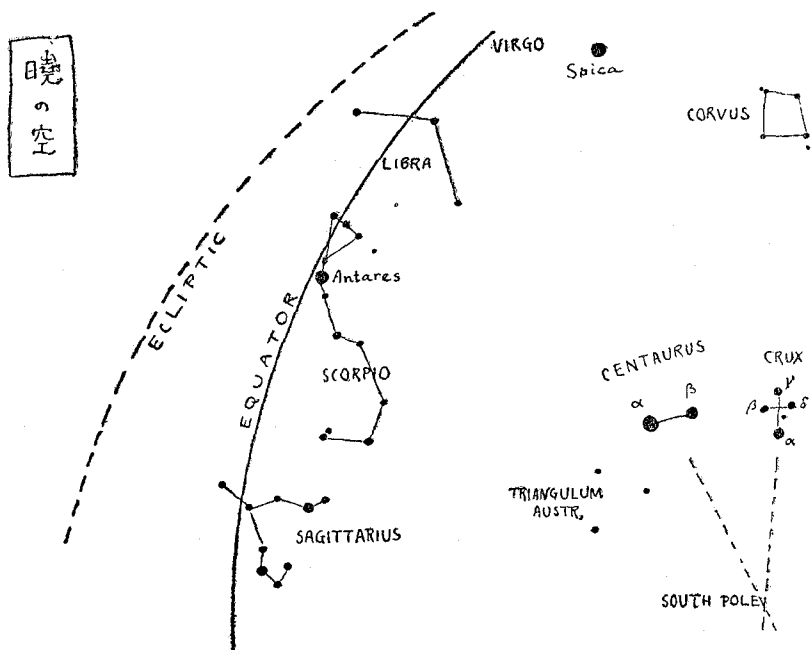
「獨り旅の身なのならば、勿論、こんで行きます!!」

と挨拶したこともある。

ところが、在外期間もいよいよ終りに近づいて、1925年の一月の末にナポリから船に乗り、東へ、刻一刻、日本への歸路に就いた。此の歸り路に、船がインド洋を通つて呉れるこゝが無上に嬉しいこゝであつた。(歐洲を去る前、或る友人たちか、シベリア鐵道によつて歸東したら、時間もかゝらなくて好からうと、親切に注意して呉れた。しかし、自分は、やはり、星を見たいがため、シベリア旅行よりも、インド洋を望んだ。

船がナポリを出た其の夜から、早くも自分は南の天空にあこがれた。そして出帆の翌夜、既に、カノープスを南の水平線に見た。あへて「始めて」といふ珍らしさの星ではないが、自分が京都を出發して以來三ヶ年の間、全く見られなかつた星であるから、久しぶり友と會ふ心が嬉しかつた。

二月一日には船が北緯二十九度の線を越えて、自分としては生れて全く始めての境地に入つた。(大正七年に自分は鳥島へ日食觀測に行つたことがある。その鳥島は北緯三十度であつた。)そして其の夕暮時、切りに南の地平線眺めて、遂にアカナシ星を發見した。エリダン座の $\alpha$ 星で、有名な一等星である。こゝに始めて、本統の新しい經驗をしたわけである。勿論、うれしかつた。

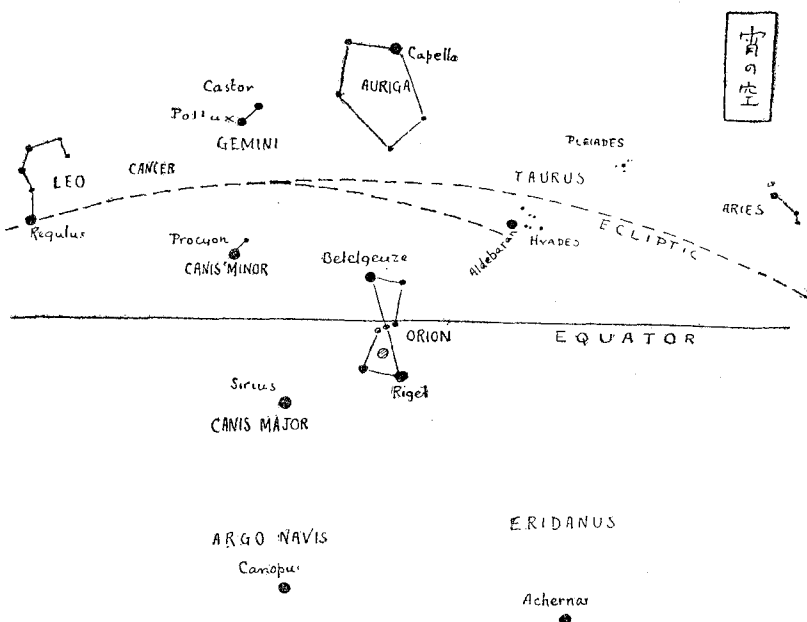


翌朝は四時に床を飛び出して甲板に上つた。その前夜、船の速度から計算して見て、南十字の星座が大丈夫見える頃だと思つたから。——果して豫想の如く、紅海を進む船の右舷に低く、かつて繪で見たまゝの十字架星座を、其の左右にはセンタウル座の $\alpha$ 、 $\beta$ 兩星が水上に浮き上つて、日出前の曉天を飾つてゐた。愉快々々。——獨りでは物足りなく、直ぐに英子をよび起して之れを見せた。

其の翌日からは此の十字星をセンタウル星は漸次高く現はれるやうになつて、いよいよ、身は南國に居るさういふ感じを深くした。

二月七日には同船者たちの求めによつて、自分は簡単な天文講話を試みた。單なる趣味の會であるし、又、時間も充分でなかつたので、自分は大した事を話さなかつた。しかし、 $\alpha$ に近く北緯十度に近いインド洋上を馳つてゐて、季節の都合上、今でなければ見えない星々も可なりあるのであるから、其の意味での星座案内をするのが好からうと思ひ、あらかじめ二枚の星圖をコンニャク版に刷つて貰つて、之れを人々に配つたりした。其の圖が今こゝに出す二葉の圖である。

會に集まるもの三十人ばかり。其の中には船のオフィサーたちも交つてゐた。時は恰も冬の季節であるから、(インド洋上の冬は 暑さに苦しめられるはだか暮しであつたけれが、)見える星々の中で、カノーブス $\alpha$ カーナー $\alpha$ を除けば



美しいものは、やはりオリオンを中心とした輝星の一團である。だから、多くは、日本内地でも見えるものであるが、たゞ此等が

(一) 酷熱の夕空を飾つてゐるこゝ、

(二) オリオンが天頂に来てゐるこゝ、

が、全く日本では経験し得られないものであり、それに尙、南天は淋しい中に

(三) カノープスミアカナトスが相並んで可なり高く、それぞれ、ア

ルゴ船をエリダン河の全幅を率ゐて天一ぱいに擴がつてゐるこゝ

が偉觀である。こうして見るこゝ、北の温帯地方人士に愛されるふたごやしの星座などは、美は美なりと雖も、何となく箱庭的なものである。

曉天の空は**おとめ**、**さそり**、**いて**、それに牽牛、織女、アークトゥル等の星々があるが、珍らしさゝ、美しさゝは、何といても南十字架**セントウル**の二星に及ぶものは無い。そして此の兩星座の景色が、吾々見る者をして、全く異境にある思ひを心底から感じさせる。

「ほんとうに、外國へ來てゐるのだ!!」

此の心持ちを以つて胸一ぱいにさせるのが此等の星々である。

自分は南十字の星座を豫想以上に美しい星座だと思ひつた。寫眞は、かつてハーヴェード天文臺に居る頃見たこゝもあつて、單に形だけは珍らしいものでは無いのだが、此の星座の美は、決して形ちばかりでは無い。其の光輝、其の色其の周圍、其の位置が皆獨特な美觀を添えてゐる。英子は之を

「神々しい星座ですね」

と言つたが、全く、一種の壯嚴な感じを與へる。——殊に形ちが羅馬式の十文字を表はして、其の釣り合ひも非常に好い。キリスト教の信者たちが之れを天來の美象としてあこがれるのも無理は無いと思ふ。

**セントウル**のα、β兩星も確かに人を惹きつける星であるが、近代天文學の初歩を讀んだものは、此のα星が我が太陽系に最も近い星だといふのを聯想して、特別な親しみを覺える。すぐ引き合ひに出されるアルファ・セントウリの星。此の有名な星が冬の曉天にβと南北相對して、諸星の牛耳を取つて強く輝やいてゐるのは何となく嬉しい満足を與へる。

北極の北極星に對して、南極は淋しい。しかし、幸ひにして、**セントウル**のα、β兩星を直角に二等分した線と、十字架星の長軸を延ばした線とがほぼ南極で交はるやうに教へてくれる。

赤道直下に於いて北極星と北斗七星とは誠に憐れな星々である。自分はシンガポアに着く日の早曉、船が北緯一度十分といふ極限に達した時、甲板に出て星を見た。上記、十字架や**セントウル**の星々が高く輝いて吾々の顔に天空を占領してゐるに引きかへ、北斗が力弱く輝やきつゝ西北の一隅に逆立し、北極星は淡い靄の中に隠れて全く見えなかつた。

天文を知る者の常識として、南天の珍しい星々は、一度は見て置く価値がある。自分は思ふ。シンガポアまで出かければ充分である。季節は年末年初の頃か、又は七、八月頃が好からう。九月、十月の頃は太陽がさそり座に来る季節であるから、**センタウル**や十字星をも其の光輝の中に隠して観望をさまたける。十二月頃の夕暮には、上記の星々の外に、まだ、大小二つのマゼラン雲が南天に見える時である。之れも亦見逃がすべからざるものである。——自分は二月十三日以来マゼラン大雲の方を見た。「天の河の斷片」ださ、かねて、きかされてゐたものであるが、實際は「天の河の斷片」以上に光りも強く、構造の複雑なところが肉眼にも見えた。マゼラン小雲の方は遂に見なかつたのは残念であつた。之れには一月、二月さういふ時季が少しく遅すぎた。

日本は幸ひ長く南北にも延びた國であるから、臺灣へ行けば、北緯二十二度にも達することが出来て、従つて可なり南方の星々が見られる。マゼラン雲は大小二つながら見えなだらうさけれど、十字架やセンタウル兩星は其の姿を全く地平上に現はしてくれる。時季は毎年二月から七月までが好からう。

勿論、小笠原以南の南洋委任統治領土は、南の星々を見るには臺灣以上の便宜がある。行く人は是非かうした星の観望を忘れられないことを望む。

(31, 1, 1926)

## た　よ　り

先日久しぶりに星の本を読んでゐましたが、大變面白い詩を見付けました。御存知かも知れませんが御知らせします。

Distant, scintillating star,

Shall I tell you what you are?

Nay, for I can merely know

What you were some years ago.

For the rays that reach me here

May have left your photosphere,

Ere the fight of Waterloo,

Ere the pterodactyl flew!

Many stars have passed away,

Since your ether-shaking ray

On its lengthy journey sped.

So that you, perhaps, are dead.

\* \* \* \*

But, supposing all is well,

What you're made of can I tell?

Yes, 'twill be an easy task,

If my spectroscope I ask.

There, your spectrum now is spread,

Down from ultra-blue to red,

Crossed by dark metallic lines,

Of your cooler layer the signs.

Hence among the starry spheres,

You've arrived at middle years:

You are fairly old and ripe,

Of our solid solar type.

Ah! your sodium line is seen

Strongly shifted towards the green,

Hence you are approaching me

With a huge velocity.

クロメリンの The Star World さ云ふのにあるのですが、ずっと以前の Nature 誌からさつたさ、こゝわつてあります。

よく韻の踏んである、強味のある詩です。

岡田幸雄